

『大谷光瑞とスヴェン・ヘディン—内陸アジア探検と国際政治社会』 勉誠出版 2014 白須浄眞[編]



★「国際政治社会」という言葉

白須は次のように言う。「国際社会に作用する政治的なベクトルが取り分けて強かった時代を印象づけようとする編者の造語である。」⇒「当時の国際社会から大谷探検隊・ヘディンに向けられた政治的な力、大谷探検隊・ヘディンから国際社会に与えた政治的な影響」

1. 本書の概要と目次

1.1 本書の概要

二人の接近	⇒	チベット	⇒	ヘディン来日	⇒	資料	これらを裏付ける
<ul style="list-style-type: none"> ・いつ親交が始まったか ・それは何故か 		<ul style="list-style-type: none"> ・チベットを巡る国際情勢 ・光瑞の支援 ・日本におけるチベット 		<ul style="list-style-type: none"> ・返礼としての来日 ・来日招聘と対応 ・西本願寺訪問と滞在記録 ・楼蘭の位置伝授→楼蘭調査と李柏文書 		<ul style="list-style-type: none"> ・手紙(親交と来日) ・政府関係文書 ・宗教専門紙記事等 	

1.2 本書の「目次」

はじめに (白須浄眞)

《総論》 (白須浄眞)

〈第一部〉 光瑞とヘディンの交流とヘディンの来日

- 第一章 **光瑞とヘディンの交流** (金子民雄)
- 第二章 **ヘディンの日本招聘—東京地学協会と大谷光瑞** (白須浄眞)
- 第三章 **ヘディン来日と日本政府及び日本の諸機関の対応** (安部弘敏)
- 第四章 **ヘディンの来日—近代日本とヘディンとチベット** (高本康子)
- 第五章 **ヘディンの西本願寺訪問とその記録写真** (白須浄眞)
- 第六章 **ヘディンの見た西本願寺—建築学からの新たな提起** (菅澤茂)

〈第二部〉 大谷探検隊の楼蘭調査と「李柏文書」

- 第一章 **第二次大谷探検隊・橘瑞超の楼蘭調査とその波紋** (金子民雄)
- 第二章 **西域長史文書としての「李柏文書」** (荒川正晴)

- 資料一 大谷光瑞がヘディンに宛てた電報と書簡の紹介（金子・白須）
- 資料二 明治天皇のヘディン「謁見」と「勲一等瑞宝章」叙勲決定に係わる日本政府（内閣）と関係各省の記録（白須）
- 資料三 ヘディン歓迎に対するスウェーデン国王からの関係者叙勲に係わる外務省と日本政府（内閣）の記録―（白須）
- 資料四 アルマ著”Mein Bruder Sven”が語るヘディンの来日（安部弘敏）
- 資料五 『教海一瀾』掲載のヘディンの西本願寺訪問の記録（太田黒綾奈）
- 資料六 『中外日報』掲載のヘディンの日本訪問の記録（門司尚之）
- 資料七 橘瑞超の楼蘭調査に関するスタインの記録―ハンガリー科学アカデミー所蔵メモ（金子）

〈付編〉 参考資料

- 参一 大谷探検隊・大谷光瑞に係わった外務官僚たち―外務省外交記録を読むためのサインと押印の集成（江間）
 - 参二 増訂橘瑞超略年譜（金子）
- おわりに（金子）

2. 取り上げる論文（目次の □印の8論文）

2-1. 総論 （白須）

ここでは、当時のチベットに関わる国際情勢、英・露・清の各国の動きが詳述され、次いでヘディンの来日の経緯とヘディンのチベット護照（ビザ）発給を中国に働きかけた支援と中国との交渉が論じられる。その間の光瑞・ヘディンのやり取りが「国際政治社会」的だというのが、編者白須の主張である。

〈背景にある国際政治社会とチベット〉

- 日英同盟（1902）
- ラサ条約（1904） ヤングハズバンド・ラサ侵攻。清の西藏宗主権否定。
- 日露戦争（1904～1905）
- 西藏に関する英清条約（1906.4.27）
- ヘディンの第三次探検（1906.8.27 インド）途中で英清条約が発効
- 英露協商（1907.8.1）
- ↓ 日露協約（1907）

ラサ条約（1904）によって一旦は否定されたチベットに対する宗主権が回復された経緯は複雑であるが、各条約の内容を見る。

- ①英国は英清条約（1906）で「英国政府は西藏の領土を併合し、又は西藏の施政に干渉せざることを約す。清国政府も亦、他の外国をして西藏の領土又は内治に干渉せしめざることを約す。」（附属書第二条）
- ②1907年の英露協商は百年余の英露対立を解消させた。そこには〈西藏に関する協定〉があり、前文に「露西亜及び大英帝国政府は、西藏に於ける清国の宗主権を認め、…」、第一条には「両締約国は、西藏領土保全を尊重し、其の内政に対し一切干渉せざることを約す」とあり、英露の協定なのに、清の宗主権を認めるという奇妙なものだった。こうして労せずチベットの宗主権を承認されたことになった清は、チベットに入ろうとするヘディンもそれを支援する光瑞をも拒否するのである。

- ③光瑞は北京で交渉（1907.4.13）、清国にヘディンの護照発行を働きかけた。英・露・清三国間で外交交渉を進めている中でのヘディンと光瑞の動きは、「三国を困惑させ」、チベットを攪乱しかねないと疑惑を懐かせて、国際政治社会から排除と制約を受ける。二人の状況を「国際政治社会」と主張する。
- ④1907年8月31日の英・露間の公文でも、「本公文の日付より三年間は何らの学術上の派遣員の西藏に入ることを許さざるを望ましきことと存知候…」とある。

〈ヘディン来日の経緯—西本願寺関係者のヘディン来日への理解〉

来日はヘディンの光瑞への謝意であるとして、光瑞の側近二人の回顧談を引用する。

- ・「後任総督（ミントー）は頗る冷淡な態度であったので、大いに憤慨して遥かに光瑞門主に書を寄せて、西藏探検について、清廷より便宜を得ん斡旋方を依頼し、且つ無事に探検を終わったならば、その結果を第一に日本に到って発表せんと申し送られた。…さあれ博士は明治四十一年に来朝して宿約を果たさんとて、西本願寺に於いて西藏探検の最初の発表を行はるゝ事となり…」（上原芳太郎）

二人はヘディンから光瑞宛の手紙を読んでいるようだが、それは発見されていない。しかし、白須は、西本願寺関係者が来日はヘディンの光瑞への謝意である、光瑞の側近が語るのだから真実だと主張する。

〈中国との交渉—大谷光瑞の北京における対清国交渉〉

- ①ヘディンの依頼を受けた光瑞は、1907年4月13日阿部臨時公使同行で清国外務部の那桐（Natan）と、北京で実際に直接交渉を持った（1907年5月19日付のヘディン宛書簡）。しかし那桐は、「極めて困難だ」とはっきりと申し入れを断った。光瑞の清国外務部の交渉は失敗に終わった。
- ②ところが4月13日の交渉の前にもう一つの交渉があったとして、白須は1907年3月1日～3月5日の間に光瑞の依頼を受けた日本公使館の交渉を詳述する。この交渉は、すでにヘディンを退去させてしまったことすら知らせなかった。また自国のワーレンバリー公使も交渉して成果を得られなかった、清国が英国と合意した「西藏に関する〔英清〕条約 1906」を盾に自信を持って交渉したからであろう。

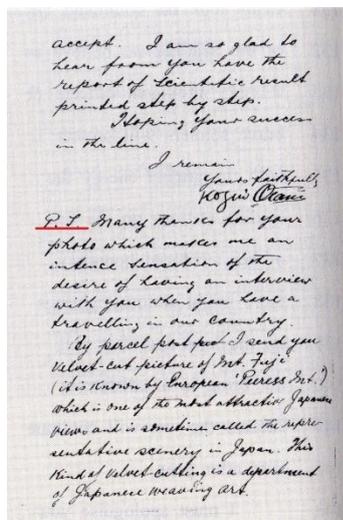
〈チベットのシガツェにおけるヘディン〉

- ①光瑞が清国外務部の那桐と交渉していたころ、ヘディンは既に（1907.3.13前後）チベットのシガツェにおいてパンチェンラマ（タシラマ）の厚遇を受けていた（『トランスヒマラヤ』）。
- ②英印新総督ミントー、チベット・ギャンツェ駐在官オコナー、さらにミントーの知人女性アニー・ベサント（タシラマと親しい）等ヘディンの背後で好意ある人々が、理解と実質的な支援をした。光瑞もその一人であった。
- ③2年間も禁断のチベットを旅行することが出来たヘディンだが、清帝国主席長官・張蔭棠（チャンインタン）から慇懃無礼な最後通牒を受け、ラサへは進むことが出来ず引き返さざるを得なかった。ヘディンはこれによってヘディンは引き返す以外に方法がなかった。清国外務部の那桐は、こうした経緯を承知の上で、何食わぬ顔で光瑞と交渉していたことになる。

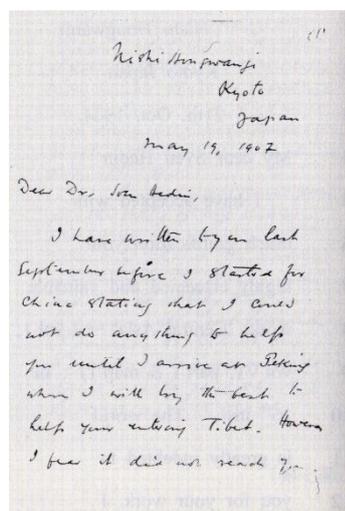
この論文で金子は、ヘディン側に残る 8 通の光瑞の手紙によって、二人の交流を描き出す。

No1 1904.3.24	本の礼状、追伸に「来日して、お目にかかれればと思います」
No2 1904.10.21	短い本の礼状
No3 1907.5.19	ヘディンから依頼の清国とのチベット交渉報告
No4 1908.9.18 (電報)	来日招聘
No5 1910.3.8	ロンドンカストックホルムでお会いしたい (妹武子新婚旅行中)
No6 1910.3.27	チベットの現況報告、河口慧海の悪口
No7 1911.2.27	瑞超の話、夫人の死去を報告
No8 1921.4.2	本の短い礼状 (スウェーデン国立民俗博物館所蔵、)

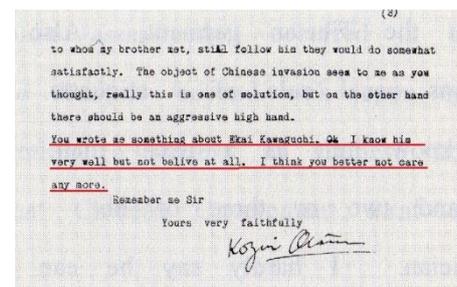
- ① 二人の関係の始まりは 1898 年～1900 年頃ではっきりしないが、1900 年当時光瑞はロンドン留学中で、英国地理学会会員であったのでヘディンの論文は読んでいた。
- ② 1902 年大谷探検隊が組織、8 月 16 日にロンドンを出発した。この時はまだヘディンとの交流はない。翌 1903 年 1 月光瑞はインドに出、二人の隊員は翌年まで調査し 1904 年 3 月に中国に出た。
- ③ その 1904 年 3 月 24 日付で、光瑞はヘディンに手紙を出した。本『中央アジアとチベット』-ヘディンの第二回探検記) の礼状。追伸に「わが国をご遊覧なさり、その折はぜひあなたとお目にかかれればと、強く思うようになりました」と書いた。
- ④ 同年 10 月 21 日付でも短い礼状。(第二回学術報告書『中央アジア旅行の科学的成果』の第一巻第六巻と地図。)



1904.3.24 手紙 PS 部分



1907.5.19 清との交渉報告



1910.3.27 河口慧海の件

- ⑤ 光瑞は日露戦争もあり、第二次隊を出さない。ヘディンは 1906 年 6 月第三回チベット探検に向いインドに着くが、英政権の政策変更のためチベットに入れない。そこで影響力のある光瑞に側面からの外交的援助を依頼した。この時の交渉内容の報告が 1907 年 5 月 19 日付の手紙である。
- ⑥ 中国側は、日本政府の非公式の申し込みも、光瑞の直接の依頼にも応じなかった。中国は「英支条約」を持ち出し内政干渉として、取り合わない。日露戦争の戦勝国日本が、ロシアに代わってチベットを狙うのではないかと、中国も英国も心配していた。交渉の内情は、「博士は…援助を遠く大谷光瑞親下に求めた。…(シナ政府との交渉) その労に対して謝意を表すために、博士は探検後に

は、ただちに日本に渡来して、真っ先に探検の結果をなすべし云々とのことであった。…（しかし光瑞の交渉は失敗したので）博士はやむなく無護照で探検をなし、日本に来朝の実行をしたのである」（『新西域記』渡辺哲信）。金子は、渡辺は光瑞宛のヘディンの手紙を見せられたか、読んでいたらしいと推測はするがヘディンの文書が残っていないので、確証は取れないと言う。

- ⑦ 1908年9月18日、光瑞は来日招聘の電報をヘディン宛打つ。そして来日したヘディンと光瑞の交流（1908.11～12）は親密なものだった。
- ⑧ 来日から1年後の1909年、光瑞は第二次隊を出す。隊は英印政庁に邪魔される。
- ⑨ 1910年3月8日付手紙は、夏にはロンドンにいますのでお会いしたいと書き、更に1910年3月27日付の手紙は、ヘディンが現在のチベット問題などを質問したものへの返信のようだが、最後の一行は「あなたは河口慧海について書いてくれました。私は彼ならよく知っております。彼はまったく信用できない人物です。私はこれ以上関わらない方が、よろしいかと思えます。」1908年の来日時も慧海の悪口はあった。また光瑞はこの後、慧海との間で「玉手箱事件」を起こす。
- ⑩ それはともかく、光瑞は1910年夏には二次隊の橋を同行して、ヘディン、スタインらと面談。この後、橋瑞超は第三次隊としてロシア経由で再び新疆に行く。光瑞は10月には帰国するが翌1911年1月27日、壽子夫人が逝去。1911年2月27日付の手紙で、瑞超がトルファンにいてと妻の死を知らせている。多分、光瑞はもう手紙を書く気分も気力もなかったのではないか。そして光瑞には疑獄事件、法主退任（1914）など大きな出来事が起き、第一次世界大戦も勃発し、二人の関係も事実上断たれる。
- ⑪ それから10年もたった1921年4月2日付の、やはり本の短い礼状が最後であった。
- ⑫ 金子は「ヘディンと言う人は、人生で失意にあたり、没落した人に対してきわめて同情と憐憫の情を持った人だったので、ヘディンの方から疎遠になったとはとても思えない。しかし、西域調査は結局、よく分からぬうちに終息してしまい、発掘品まで分散してしまった…」「1926年秋以降、ヘディンは（第四次探検のため）10年以上中国に滞在しながら、光瑞と接触しようとした気配もない。二人の関係は一体なんだったのだろうか。」と二人の交流を語る。

2.3 第一部第二章 ヘディンの日本招聘—東京地学協会と大谷光瑞

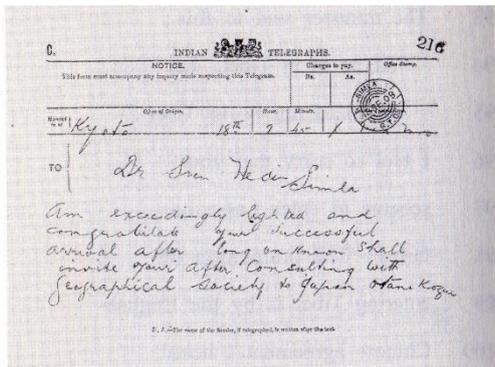
（白須）

白須は、ヘディンの日本招聘は東京地学協会によるものではなく、大谷光瑞が招聘したのだと強く主張する。その根拠は、探検を終えてインドのシムラにいたヘディンへの電報が東京から発せられたのは1908年9月18日で、9月19日の招聘決定の東京地学協会評議員会の前であることから、招聘に光瑞が直接関与していただけではなく、先行していたことは間違いないと結論づける。

①更に、1907年5月19日付のヘディン宛の書簡で、直接来日を促していたと言う。ヘディンがこれを受けとれたのはインドのシムラであり、そこに招聘電報が重ねて届いたと言う。

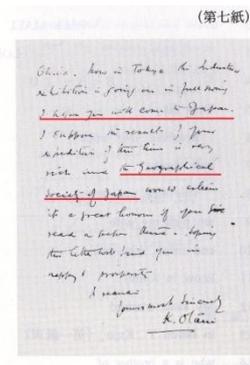
②だから「ヘディンの来日は「光瑞なくしては実現しなかった」というのは、決して誇張でも誤りでもなかった。」地学協会の記録や報告書だけを見ると、「逆に見てしまうことにもなる」と白須は言う。

③東京地学協会は創立10周年の記念すべき年に当たり、協会が単独で独自に主導したように記録するのも理解できないわけではない。「光瑞の招聘に、むしろ東京地学協会や…日本政府・外務省の方が相乗りしてしまったというのが偽らざる実情のようである。…[いたしかたのない誤解]であった。」



招聘の電報

I hope you will come to Japan.
I suppose the result of your expedition of this time is very rich and the geographical Society of Japan would esteem it a great honour if you read a paper. Hoping this letter will find you in happy & prosperity.
I remain, your most sincerely,
K. Otani (第八紙末)



1907.5.19 付 書簡

2.4 第一部第四章ヘディンの来日—近代日本とヘディンとチベット

(高本康子)

はじめに

日本人がチベットに関心を持つのは、明治期以降頻繁でない。チベットは、周辺的な存在であり、中国・満洲に繋がる間接的な地域として考えられてきた。そのようなチベット観、大陸観に影響力をもったのが中央アジアの地理的調査で有名なヘディン来日で、学者・宗教者だけではなく、一般の日本人にインパクトがあった。日本人に対するヘディンの影響、例えばこの時のマスコミがこぞって組んだヘディン特集や、講演を紹介する記事等については、今までほとんど注目されてこなかった。

第一は、1908年のヘディン初来日をめぐる報道について

第二は、昭和期特に日中開戦前後にヘディンが次々と日本語訳されたことである。

この二つ事象を取り上げ日本人のチベット観、大陸観形成にどのように影響したかを検討する。

1. 明治期の初来日

1.1 明治期のチベット情報

1890年代前半にかけて若い世代の仏教徒の間に、「入蔵熱」と呼ばれる関心が盛り上がる。

1901年に活仏が来日、1903年に河口慧海のラサからの帰国、1905年には僧侶能海寛がチベット国境で殺害され、そして1908年ヘディンが来日した。これらの出来事を契機にチベット事情が次々と新聞紙上に紹介され、チベットブームが起る。ただ、慧海のチベット情報は正確さを欠き、真偽を疑われた。

1.2 報道の内容

ヘディンは来日当初、大多数の日本人は彼を殆ど知らなかった。しかし講演会の報道が出ると「大騒動」になる。報道はヘディンの探検を「活ける冒険小説」的と表現する。またヘディンの名には「大」「世界の」が定冠詞のように付く。これが彼に対するメディアの認識である。また話題の中心は、タクラマカン砂漠からついに生還した話で「千辛万苦」「大風雪の中を彷徨」等の表現が頻繁に見られる。そしてヘディンが紹介する最新のチベット情報として、「西藏人の奇習」的な新聞記事が多い。

1.3 報道における注目点—ヘディンの来日かかわる一連の報道で注目するのは二点である。

- ① 先行するイメージが再編され、ヘディンによって河口慧海の真偽が保証されたこと
ヘディンと言う欧米の文明とアカデミズム権威によって、信憑性を保証され慧海のチベットを否定した人々が受け入れたのである。
- ② その後、戦中戦後へと続くヘディンのイメージの特徴が、この時期既にできたこと

ヘディンのイメージの第一の特徴とは、探検調査活動が「壮挙」であり、その原動力は彼の「不撓不屈」の精神力だ。つまり、ヘディンの探検は、人々の精神発揚のために未知の困難に挑む壮挙と読み替えられる。そして、大陸で多くの日本人が活動を始める日中戦争開戦以後の大陸関係翻訳ブームでヘディンはまた登場する。

2. 昭和期の著書翻訳

2.1 「大陸」関係書の出版ブーム

1937（昭和12）年に戦争が始まると、大陸に関する本の出版が急増する。時局に迎合する書籍が多くなったが、内陸アジアの旅行記の翻訳ブームでもあった。戦争が大陸への関心の盛り上がりには拍車をかけたのである。支那西北地域に対して国民は注目し、知識を供給する読み物として、ヘディンなどの本が翻訳されたと思われる。

ヘディンの著作が翻訳出版されたのはこの時期が最初である。1938～44（昭和13～19）年までの7年間で15点にのぼる。この時期の集中的な出版は、ヘディンの旅行記に関心が高まった最初の時期として注目すべきである。その中でも、新疆地方を自動車で探検し、現地の戦争状態が生き生きと語られる第四次の旅行記に集中しており、8点に及ぶ。（有名な第二次・三次隊のものは訳されていない。）

また一般向け旅行記の『チベットの征服（A Conquest of Tibet, 1934）』は、チベット探検部分だけの縮刷版で、①高山広吉訳『西藏探検記』（1939）、②吉田一次訳『西藏征旅記』（1942）、③田中隆泰訳『禁断秘密の国』（1943）の3点が翻訳出版されたのである。一つの著作に三種もの訳本が出たのはヘディンだけである。この本では現実のチベットがどういう所かではなく、障害に屈せず「征服」していく所として興味が持たれた。1908年来日時「深遠なる学識と旺盛な気力」の人として注目されたが、翻訳ブーム時はそれが抜け落ち、「学識」には一切言及されない。

おわりに

明治期のヘディンの来日報道で、①慧海のチベット情報に正当性が付与され、②ヘディンの壮挙は、その対象となるべき世界は「海外雄飛」という日本人が目指すべき世界を知らせる役割を果たした。

ヘディンの活動と著作は、未知の領域における困難を精神力で克服し、精神力によって進出を果たし、成功の可能性を示して当時の日本人を鼓舞したと言える。

★ヘディン著作目録（金子・1981）論文中の7年間に翻訳が集中した15点、うち①印は第四次隊の8点である。

①1938年『馬仲英の逃亡』（小野忍訳）、1939年②『中央亜細亜探検記』（岩村忍訳）③『赤色ルート踏破記』（高山洋吉訳）④『北京より莫斯古へ』（高山洋吉訳）⑤『西藏探検記』（高山洋吉訳）、1940年⑥『ゴビの謎』（福迫勇雄訳）、1941年⑦『独逸への回想』（道本清一郎訳）⑧『リヒトホーフエン伝』（高山洋吉訳）、1942年⑨『ゴビ砂漠横断記』（隈田久尾訳）⑩『探検家としての余の生涯』（小野六郎訳）⑪『西藏征旅記』（吉田一次訳）、1943年⑫『熱河』（黒川武敏訳）⑬『彷徨える湖』（岩村忍・矢崎秀夫訳）⑭『禁断秘密の国』（田中隆泰訳）、1944年⑮『絹の道』（橋田憲輝訳）

2.5 **第一部第五章 ヘディンの西本願寺訪問とその記録写真**

(白須) 8/11

1908 (M41) 年、ヘディンが西本願寺を訪問した際のこの有名な写真は、京都成井写真館の記念写真で、西本願寺内において撮られた。その撮影日時は12月2日昼食の後、講演会の前。



仏教大学長※ 21 世明如の子 光瑞の弟 本願寺侍真長 本願寺執行 梅上弟※

後列	藺田宗恵	大谷尊宝	大谷尊由	藤枝沢通	梅上尊融	堀賢雄
前列	大谷武子	ヘディン	大谷壽子	大谷光瑞	九条絢子	

光瑞の妹・歌人※

光瑞夫人・妹は皇太子妃

夫人の妹

2.6 **第二部第一章 第二次大谷探検隊・橘瑞超の楼蘭調査とその波紋**

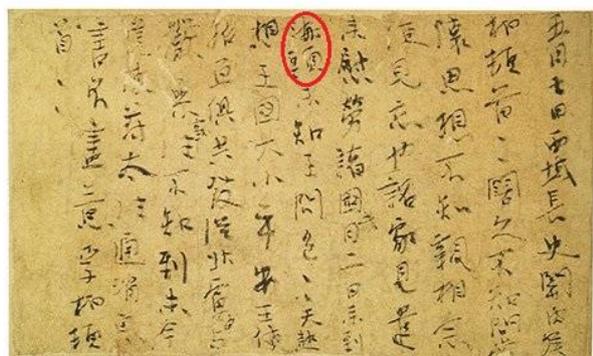
(金子民雄)

この論文は、橘瑞超『中亜探検』(中公文庫)の解説とほぼ同じ内容と言ってよい。

楼蘭は1900年、ヘディンがロプ・ノールの岸で発見し、翌1901年に調査した。1906年のスタインの後、1909年3月には、瑞超も発掘調査していわゆる「李柏文書」を発見した。瑞超は詳しい地図に頼らず迷わず楼蘭に到達した。その理由は金子が瑞超から直接聞いて明らかになった。表題の波紋とは、なぜ楼蘭に直接到達できたのかとの疑問と、出土場所が本当に楼蘭かと論争が起こったことである。

・第二次大谷探検隊・橘瑞超と野村栄三郎二人の調査目的は、①モンゴルのチベット仏教の把握、②中央アジアに住むトルコ人のイスラム教がどのようなものか、③(これが主目的)東アジア仏教に流布する漢文仏教經典の原典となるサンスクリットで書かれた古写本を、西域で捜すことだった。

・橘瑞超、単独で楼蘭へ—トルファンからコルラに入り、ここで二人は分かれ、橘はタリム河上流へと南東方向へ旅し、ロプの砂漠を横断して楼蘭を目指し、1909年3月11日にロプ・ノールに到着した。目的はヘディン、スタインよりも更に詳しく仏蹟を調査することだった。5世紀初め古代楼蘭(鄯善国)を通った僧・法顕によって、小乗仏教が信奉されていたことが知られている。



挿1 "Mein Bruder Sven"

2.8 第三部資料四 “Mein Bruder Sven” が語るヘディンの来日

(安部弘敏)

ここでは妹アルマのドイツ語版『兄スヴェン』の第9章「トランスヒマラヤを越える探検旅行（1905－1909）」からヘディンの来日の記録を読み解く。ヘディン自身は『探検家としてのわが生涯』の最終章で簡単に触れているだけだが、『兄スヴェン』はヘディンの日記に依拠し、内容も詳細で、真意もわかる。来日中の滞在記録は別紙。

- ①なぜ来日をしたのかーワーレンベリ公使や英印軍司令官に「日本人がヨーロッパ人を招待するのは極めて珍しい」「二度と巡ってこないチャンスを逃さないように」と勧められた。ヘディンも「この旅はいい保養になる」「…日本に行かないで故郷に帰ったとしたら、私はそれを絶えず後悔するであろう。」と期待して来日した。
- ②西本願寺当事者たちは、来日はチベット行で光瑞に支援を依頼した際の来日の約束を果たすためだと言う。光瑞についての記述は極めて少なく「大谷は日本で最も主要な仏教の高僧である。その上彼は次期天皇の義兄にあたる…」と来日途上の日記の一文しかない。
- ③来日してヘディンは多くの軍人・政治家に面談した。東郷平八郎、乃木希典、山県有朋、伊藤博文
- ④ヘディンの日記は毎日書かれており、その全行程を追うことができるが、西本願寺に宿泊した12月2日前後は、ヘディンが何も書かなかったのか、アルマが載せなかったのかは判断できない。光瑞と西本願寺について記載が一切見られないのは不自然であり、なぜ語られていないのか、実に大きな課題だ。
- ⑤『探検家としてのわが生涯』の最終章に my special friend として Count Kozui Otani とある。膨大な著作の中で光瑞に触れたのは、この1926年ロンドン版だけだ。1925年ニューヨーク版・1928年ドイツ語版・1930年スウェーデン語版の三冊には光瑞の名はない、理由は分からない。(金子)。

lectured before the Diplomatic Corps. Among all the banquets given in my honour I remember in particular the one at which the Swedish Legation and I were the only guests, our hosts being twelve generals, world-famous from the Russo-Japanese War. Victorious old Oku made the principal speech in ringing Japanese, which an interpreter translated into English. Admiral Togo, Marshal Yamagata, and General Nogi were also acquaintances not to be forgotten. Among my special friends were Count Kozui Otani, whose guest I was for several days in Kyoto, Marquis Tokugaya and his brother the prince, Professors Ogawa, Yamasaki, Hori, Inouyé, Omori and many others. The last-named was Japan's most noted seismologist. I met him again early in October, 1923, in peculiar circumstances. At that time I was travelling on the same Tenyo Maru, from San Francisco to Yokohama. In Honolulu, Omori came on board. The great earthquake of September 1 had summoned him home from Australia.

『探検家としてのわが生涯』の最終章

はじめに

二人の接近、ヘディンの来日、チベット、楼蘭、によって当時の国際社会から政治的に制約された光瑞とヘディンの活動の様相を歴史的に分析する。

第一部は二人の接近をトレースし、チベットへの深い係わりによって、二人が最接近するヘディンの来日へと焦点を絞り込む。第一部第一章で金子が、ストックホルム民俗博物館に所蔵されている光瑞のヘディン宛英文書簡を使って、二人の交流の経緯を詳細に描く。

1908年の来日は、ヘディンへの光瑞の支援に対する謝礼から実現したのだが、現実には官民挙げての大歓迎となってしまった。ヘディンは「東京地学協会の招待で来日し、大谷光瑞とも会っている」と言う誤解を解きたい。それが第一部第二章の白須論文である。その官側の異例の歓迎と対応が第三章「政府及び日本の諸機関の対応」で、民側の歓迎の様相を整理したのが、第四章の高本論文である。日本社会の過熱ぶり、チベットのイメージ形成、河口慧会との関係、その後のヘディンの集中的翻訳と広い視野から論じられる。

二人の積年の交流のピークである12月3・4日の西本願寺訪問を、その記念写真を歴史的映像資料として、第五章で白須が論じる。また当時の西本願寺建造物を解説するのが、第六章菅澤論文である。

二人を結び付けたチベットの、当時の錯綜する政治情勢を詳細に論じたものが白須の総論である。

第二部では大谷探検隊の最大の成果と言われる楼蘭の「李柏文書」について、この発見の内幕を、直接橘瑞超から聞き取り調査した金子が論じるのが第二部第一章で、「李柏文書」そのものを解説するのは、第二部第二章である。

第三部は資料集でヘディンの妹アルマの『兄スヴェン』の紹介、ヘディン来日を報じた宗教専門紙の記事解説と橘の楼蘭調査に関するスタインの記録で、いずれも興味深い。

光瑞とヘディン、二人の人物像

大谷光瑞・・・関露香（大阪毎日新聞社・著作『大谷光瑞』T5.5 政教社）によれば、「(探検隊の) インド孟買での旅行の様子は所謂大名行列の堂々たるものであった。…また、前法主光瑞師と本願寺執行所とが常々意志の疎通を欠き、両者の間に一大溝渠の横たわりて居た。」

その序を書いた三宅雪嶺は、「上人は大いなる駄々っ子、一代の驕児、充実に発育したスポイルド・チャイルドである。二楽荘は、上人失脚の一原因となった。かれは天分に富んで居り、殆ど天の寵児といえる。惜しい事には、一の堅忍性に乏しく、万難を排して一貫して進むことが出来ぬ。堅忍性に乏しいが為め、万能余って一心足らぬ結果を生ずる。…本願寺は上人を持って剰し、災難と号しているが、持って剰されるのが悪いのか持って剰すのが悪いのか。」と散々である。もちろん、「眼識は到底凡人の思い及ばざる所である。」と褒めてもいる。光瑞自身、「六条（本願寺）は腐敗した一種の空気が満ちて居る、私の頭と本山の坊主とは殆ど一世紀の差がある。自分の理想を実現するには…」と常々言っていたという(関)。

探検後は、アジア主義者として中国・台湾・朝鮮と目まぐるしく活動。昭和 15 年内閣参議（近衛）、同 17 年大東亜建設審議会委員（東条）、同 19 年内閣顧問（小磯）を歴任し、戦後 22 年公職追放に遭う。

ヘディン・・・「ノーベル賞の国際政治学」（高崎経済大学『地域政策研究』2014 年 2 月号）

ヘディンはスウェーデン・アカデミー会員でもあったことは、よく知られているが、彼がノーベル賞に関わっていたことは案外に知られていない。

まず彼自身がノーベル文学賞候補に推薦された。

表 2 ノーベル文学賞候補、ヘディンの推薦者一覧

選考年	候補者	推薦者	職業・肩書	選考結果
1912	スヴェン・ヘディン	フレドリック・ヴルフ (Fredrik Wulff)	スウェーデン・ルンド大学教授	受賞者はドイツのハウプトマン (Gerhart Hauptmann)
1913	スヴェン・ヘディン	フレドリック・ヴルフ (Fredrik Wulff)	スウェーデン・ルンド大学教授	受賞者はインドのタゴール (Rabindranath Tagore)

後年、彼は 5 名の候補を推薦している。そのうち 1 名は日本人である。その賀川は 47 年にも推薦されているが、47 年の受賞者はジッドである。

表 3 ヘディンのノーベル文学賞候補推薦一覧

選考年	候補者	職業・肩書・国籍	ノーベル文学賞選考結果	備考
1938	パール・バック (Pearl Buck)	作家・アメリカ	同年受賞	『大地』(1931年)などの作者。同年、スウェーデン・アカデミーの他の3会員もパール・バックを推薦している。
1938	マーガレット・ミッチェル (Margaret Mitchell)	作家・アメリカ	受賞者はバック	『風と共に去りぬ』(1936年)の作者。
1939	胡適 (Hu Shih)	哲学者・文学者・中国	受賞者はフィンランドのシランパー (Frans Eemil Sillanpää)	北京大学教授・学長、駐米大使、台湾政府外交顧問などを歴任した。
1940	林語堂 (Lin Yutang)	作家・中国	受賞者なし	北京大学教授の後、1939年にアメリカに渡る。1940年と1950年に、パール・バックも林語堂を推薦している。
1948	賀川豊彦	作家・日本	受賞者は T. S. エリオット (T. S. Eliot)	

選考年	候補者	職業・肩書	推薦者	職業・肩書	推薦状日付 (差出地)
1947	賀川豊彦	作家	クヌート・ベルンハルド・ヴェストマン (Knut Bernhard Westman)	スウェーデン王立文学史・古美術アカデミー会員、ウプサラ大学教授	1946年1月31日付 (ウプサラ)

おわりに

本書の最後に、金子民雄氏は次のように言う。

「ところでこれほど接近した」光瑞とヘディンであったが、二人はともに生前多くを語らなかつた。不思議である。」

その理由を、①光瑞の方では、ヘディンのチベット調査への支援と自分の探検隊が英国によって苦境に陥ったこと、更に本願寺疑獄事件で法主を辞し、探検からも手を引いたからであり、②ヘディンの方は、英国の制止を振り切ってチベットに潜入したことが、調査で発見したトランスヒマラヤ山脈を新発見にあたらないと英地理学協会では避難されたことと関係していると述べ、チベット問題が二人に多くを語らせなかつたと推測している。

「いずれにせよ二人はともに、その交流を語る時と場をこうして失っていったのである。」

絹川が考える「ヘディン来日の理由」

- ① 光瑞の支援に対する、感謝の気持ち（西本願寺関係者の思い）
- ② 光瑞の社会的ステータスに対する興味
- ③ 日本政府（地学協会・大学）の招聘である
- ④ 日露戦争に勝利したアジアの小国日本への興味・関心
- ⑤ 英印軍司令官キッチナー元帥の強い勧め
- ⑥ 駐日ワーレンベリ公使の勧め
- ⑦ 探検後の保養と休養

（注）決して①だけが来日の大きな理由ではない。

- ②「大谷は日本で最も重要な仏教の高僧である。彼は次期天皇の義兄である」（アルマ）
- ④故国スウェーデンは常に大国ロシアの圧力・脅威を受けていた。また皇帝ニコライ二世と親交があった。
- ⑤「日本人がヨーロッパ人を招待するのは極めて珍しいことだ。…日本行のチャンスを逃さないことだ」（金子）
- ⑥日本に来るようにと説き勧める手紙（アルマ）
- ⑦「私はこの旅をいい保養になるだろうと楽しみにしている」（アルマ）

ヘディンの日本訪問と西本願寺訪問の詳細

年月日	アルマ「兄スベェン」		教海一瀾&中外日報	
	場所	事項	場所	事項
9月	シムラ	光瑞から招待電報		★教海一瀾一西本願寺の機関的雑誌、15000部発行
10月8日	シムラ	ボンベイへ出発		★中外日報一宗教専門紙、広く社会的関心事も掲載
10月14日	ボンベイ	上海へ		
11月2日	上海			
11月4日	上海	ヘディンを迎えに堀賢雄派遣		
11月6日		日本へ出港		
11月8日	長崎	光瑞から歓迎の花束届く		
11月9日	長崎	長崎観光		
11月10日	神戸	光瑞が従兄弟・大谷尊宝を派遣歓迎、高級和風旅館を手配		
11月12日	横浜	地学協会の歓迎東京公使館へ		
11月13日	東京	挨拶回り	東京	
11月14日	東京	皇后・皇族と会う	東京	
11月15日	東京	地学協会歓迎パーティ、名誉会員・金メダル授与	東京	
11月16日	東京	東大で来日初講演、大盛況	東京	午後3時、西本願寺築地別院・報恩講法要に参拝。馬車を駆って来院。案内は堀、同行ワーレンベリ公使・小川琢治他3理学士。大谷尊由法要中で面会せず。後東大講演会へ。
11月17日	東京	芝増上寺、早稲田大学で講演		
11月18日	東京	慶應義塾で講演	*名古屋	*名古屋別院を訪問、講演。（*白須による）
11月19日	東京			
11月20日	日光	日光東照宮観光		
11月22日	東京	皇太子と昼食会、仏語で講演		
11月24日	東京	華族会館で議員に講演		
11月25日	東京	天皇に謁見、12名の将軍の祝賀会		
11月26日			名古屋	(名古屋入り、講話) ?
11月27日	名古屋	名古屋別院訪問、講演?	名古屋	
11月28日	名古屋		名古屋	未明名古屋着。西本願寺役僧の出迎えを受け、名古屋ホテルへ。朝食後名古屋城見学、後別院で探検談、聴衆700名極めて盛会なり。午後4時京都に向かう(地学雑誌vol12. 1No6による)
11月28日	京都	京大学長ら歓迎	名古屋↓ 京都	午後7時8分京都着、名古屋より入洛。大谷尊宝出迎え、他に菊地大麓他約60名。差回しの馬車で午後8時10分沢文旅館に投宿。
11月29日	京都	1000人以上の学生に講演	京都	午後2時、京大で講演
11月30日	京都	奈良、東大寺観光	京都	堀以下数名と奈良に遊ぶ。午後5時52分桃山駅尊宝の出迎え、観月橋畔・三夜荘に一泊あり。山水風月の歓を尽くさる。

12月1日	京都?	12/5までの行動不明?	京都	午前桃山駅発車、宇治鳳凰堂より黄檗山に詣りて帰洛。
12月2日	京都?	12/5までの行動不明?	京都	探検家スヴェン・ヘディン博士来山す。午前10時30分尊由・尊宝ら役員に出迎えられ、握手の後、菊之間にて休憩、名刺の交換など。次いで鴻之間に向かわれ、光瑞に出迎えられて上段の御席で対話あり。次いで両堂に参拝し終わって黒書院一の間に入り光瑞と共に夫人他奥向きの方々と対話。正午近く白書院に於いて光瑞、夫人、京都府知事、京大学長等と共に昼餐。すべて古式（足利時代）に則り、ヘディン非常に満足す。午後2時より白書院前庭の舞台で能狂言を観覧。余興後再び黒書院で光瑞と種々の対話。午後6時より同所で晚餐（茶道会席）。午後7時30分鴻之間にて講演。仏教大学生・本山関係者・新聞社等々続々と来集、800人（傍聴人は1000有余人）。ヘディンは羽織袴の日本式礼装。正面の地図を使って興味ある世界大探検の状況を1時間20分講話あり。通訳は堀賢雄、終了は9時40分。鎖之間に於いて一泊。
12月3日	京都?	12/5までの行動不明?	京都	午前8時朝食後本山より記念品贈呈。ヘディン厚遇を謝し10時25分尊由ら役員一同の見送りを受けて沢文旅館に帰館された。
12月5日	?	山県有朋訪問、チベットを談		
12月6日	京都	日本最後の講演		
12月7日	大阪			
12月10日				午前11時37分来山、帰国の挨拶。白書院で休憩・昼食。午後1時より黒書院に於いて光瑞・夫人などと会見、約3時間に亘る対話あり。午後4時38分帰館。（中ア探検中ヘディンに3000円を送って助けた。今回も帰国に際して相当のものがあると噂あり）
12月11日			京都	（京都発を変更して買物と荷造り）
12月12日			京都↓ 下関	午前10時30分京都発。駅へは尊宝から見送り。堀は韓国まで見送り同行。
12月13日	京城	日本を去り朝鮮へ		（朝、下関発、韓国へ）
12月16日	//	講演。明石元二郎と会う		
12月17日	//	伊藤博文と会談		

参 考 図 書 (追加説明)

『大谷光瑞とアジア 知られざるアジア主義者の軌跡』柴田幹夫 2010. 8. 10 勉誠出版

第二部 大谷光瑞小伝 (柴田)

第三部 大谷光瑞とアジア—第八章 大谷光瑞とチベット (高本)

・大谷光瑞年譜 (柴田)

- ① 光瑞とアジアとの関係を、朝鮮半島、ロシア極東地域、中国大陸、チベット、南洋それにトルコと言う地域から考えた本である。また同時に歴史的な事象として国内外における光瑞の行動や文化遺産などを考えてみたもの (但し、中央アジアと台湾が抜けている)。
- ② 本の中には、「大谷光瑞とその時代」として、海外布教、「言論人としての光瑞の誕生」と言う論文があり、徳富蘇峰との友情の中で、言論人光瑞が生まれたと書かれている。

★大谷光瑞小伝 (柴田)

1876 (M9) 12.27 京都生・長男

初めての外遊 1899 (M32・結婚の翌年 24 歳) 1 月から 3 ヶ月以上。目的は、国家の前途と宗教の将来について、深く考えるため。

西本願寺の海外布教—在留邦人に対するの布教活動

随行員に死者 (天然痘) を出すほど過酷なもので、光瑞が見て体験したものは、汚穢にまみれた中国と上海・香港の諸外国がらみの繁栄する中国であった。

インド仏跡参拝旅行とヨーロッパ外遊 1899 (M32) 年 12 月 宗教制度研究のため

中央アジア探検 1902 (M35) 年 8 月 第一回

本願寺法主時代 1903 (M36) 年

光瑞の行動は、自由闊達にして生気に満ちたいきいきとしたものであったが、本願寺法主としての光瑞に対して、さまざまな批判が内外から起こったのも事実である。内側からは多くの負債を抱えていた本山に対して向けられたもので、多くは本願寺と大谷家の財産区分の不明瞭性を指摘するものであった。また外部からは探検隊の派遣、二楽荘の建設などに多額の費用を要したことに対する批判であった。⇒疑獄問題の責任をとって辞職。

諸国漫遊時代 (上海) 1916 (T5) 年～1926 (S1) 年、(大連) 満鉄と光瑞—本願寺は満鉄の大株主であった。戦後その負債が教団に大きく響いた (『浄土真宗と戦争責任』岩波)

光瑞の引揚げをめぐって 敗戦の前年 1944.11 引揚げ途中、1945.11 膀胱腫病で大連で入院。1946.6 月ソ連にスパイ嫌疑で拘留、7 月 14 日釈放。1947 (S22) 年 2 月 28 日帰国。

光瑞を、「内閣参議をつとめ、「太平洋戦争」の積極的支持者である政治家とみるか、日本の多くの国民の尊崇を集める宗教家とみるか」大きな問題となった (石堂清倫)

光瑞と南洋 **ゴム園の経営** 1916 (T5) ～1918 (T7) シンガポール郊外、車のタイヤ用 (先見の明)

孫文との交流 1913 年孫文は本願寺を訪問、1916 (T5) には近隣の孫文邸を往来、二人の関係は深かったと考えてよい。

終焉の地別府、忘れられた巨人 1947 年 3 月引揚げ船で佐世保へ、一旦京都へ帰るも再び温暖な別府へ戻る。1948 年 10 月 5 日 別府で死去 73 歳。政局の混乱 (芦田内閣総辞職) とともに、すっかり忘れられたものになった。日本人としては最大の巨人の一人 (大宅壮一「近代日本を作った百人」)

★第八章 大谷光瑞とチベット (高本)

ヘディン来日の時点で、ヘディンの旅行記は全く日本語訳が出されていない。ヘディンの最初の訳は『独逸従軍記』宮家寿男訳・大倉書店・1915年。中央アジア関係のものは、1938年『馬仲英の逃亡』小野忍訳・改造社が最初。

長谷川伝次郎は1925年インドに渡り、1927年夏インドからヒマラヤを越えて、カイラスを巡る。1929年帰国、1932年に『ヒマラヤの旅』（中央公論）として大判の美しい写真が収められ、日本最初のヒマラヤブームを起こした。

光瑞が門主を辞任した後、光瑞自身によって大谷探検隊の総括がなされなかった。それは「放棄」とみる人もいる（山田信夫）。

光瑞の関心あり在り様は著しく変化したと言える。⇒大谷探検隊が「宗教」と学術調査に重点を置いたものだとすれば、それ以後の活動の重点が「社会」と「産業」へと変化し、その関心のありようは、考古学的、仏教的、学術調査と資料収集を中心としたものから、産業の振興へと変化した。「我が帝国の相談役」として、日本の興亜計画に突き進んだ。

高本康子：北大スラブ研究センター プロジェクト研究員、日本近代史・比較文化論。著作；『近代日本におけるチベット像の形成と展開』芙蓉書房 2010 『チベット学問僧として生きた日本人』同 2012 東北大学卒。群馬大（白須本の論文時）→北大（現在）

『二楽荘史談』和田秀寿編著 2011. 11. 17 国書刊行会

二楽とは、海と山の二つの景観を楽しむ、の意味。

第五章 第一節「大谷探検隊の背景と概略」…大谷探検隊にとって二楽荘がどのような意義を有していたかについて論じられる。仏跡発掘品の陳列。

大谷光瑞の王立地理学協会（The Royal Geographical Society）入会は1900年（M33）6月25日で、ス
タインと同日の入会。

1908年11～12月ヘディンが来日したが、二楽荘の竣工は1909年9月なので、その時には二楽荘に案内していない。

ヘディンが西本願寺を訪問、その際、楼蘭の正確な経緯度を光瑞に伝え、それをトルファンの瑞超に知らせ、楼蘭で李柏文書を発見した。

三宅雪嶺（雪嶺迂人；世間にうとい人、志賀重昂らと正教社を設立）の大谷光瑞評がある。

二楽荘 阪神間のモダニズムの建築物

1908（M41）3.17 起工 8.12 棟上げ

1909（M42）9.20 竣工

1911（T1） 武庫中学

1914（T3）5.14 光瑞門主引退

1916（T5）1.17 久原房之助に売却

1932（S7）10.18 不審火で全焼

『中亜探検』橋瑞超 第三次大谷探検隊の記録（瑞超自身二回目の調査行）

『ヘディン伝—偉大なるシルクロードの探検者』金子民雄 1972.8 新人物往来社 1989.1 中公文庫

・スヴェン・アンデルス・ヘディン 1865年2月19日ストックホルム生、1952年11月26日ストックホルムで死去 87歳（光瑞の11歳年長）

・ヘディンと言う人は、自分のことを語らない人だった（第一回探検で従者二人を失う事件以来と言われた、32歳）。おびただしい旅行記を書きながら冷淡なくらい、自分個人のことには触れない。

・ヘディンの生涯を決定的にする事件…1880年5月15歳の春、ノルデンショルドの北極探検船ヴェガ号を知ったことである。これは1878年北極北東航路に挑戦したまま消息を絶ち、脱出に成功して1880年4月22日にスウェーデンに帰還した事件である。途中1879年9月2日横浜に入港した。東京地学協会がメダルを授与している。粉事件以後、ヘディンはすっかり人間が変わってしまって、極地探検に夢中になる。後20歳の時、4歳年上のナンセンと友人となり終生の友の一人となった。

・1908.9.24 インド総督邸（ミントー卿）で1906～1908のチベットの講演、トランスヒマラヤと言う名称についての考え方を説明。次に「次の訪問国日本でも同じようなことを語り、翌1909年1月17日ストックホルムに帰った。」と日本訪問については、400ページを超える本にたった1行である。

・金子は、このヘディン伝で「ヘディンの日本滞在記」の章を除いた。その理由は、書き溜めたものの分量が多いこと、再版、文庫化でも、いまさらと言うことで加えなかった。（文庫あとがき）と言うことは金子にとって、ヘディンの探検の生涯を書くとき、光瑞と日本訪問は重要なことではない、ヘディンの数多い援助者の一人に過ぎないと思われていたと言っていると思われる。

・一方、金子にとってヘディンと言う人は、「19世紀から20世紀にかけては、地球上最後の地理学発見の時代でもあった。このような探検史の黄金時代、中央アジアを舞台として、実に多くの探検家を輩出せしめたが、こういった中で最も大規模でかつ長い年月、その未知の自然解明に業績を上げた人物」と称賛する。

・中央アジアとは、不思議な魅力を持った土地であった。その僻遠な沙漠や高原や隊商の群れを想像するだけで、いつでも陶然たる境地に没入させてくれる力をもっている。

1901年 楼蘭発見→1906年 エルスウォース・ハンチントン（米地理学者）、スタインは仏教のストゥーパ確認→1909年 橋瑞超 李柏文書発見

・国際政治社会と白須は言うが、光瑞は当時はそれほど政治的ではなかったし、大谷隊は政治を意識していない。むしろ無頓着だった。それに光瑞は爵位を持ち、皇室にも縁があったから、日本の外務省もその扱いに苦慮した。それは前著の外交電などで見た通りである。政治的と言うのなら、むしろ探検後のアジア主義者としての光瑞の方だろう。

・第二回の訪問（世界旅行の途中）、関東大震災後に訪問。サンフランシスコ滞在中この報を聞いたので、数回の講演料をそっくり寄付、そして来日した。詳細は分からない。58歳。

・第三回は1929年64歳 飛行機による中央アジア計画（第4回）、これは英国が反対、中国に反対運動起こる。実現のため東奔西走する。その途中での日本訪問。敦賀・東京・神戸に立ち寄る。詳細は不明。

・1939年『蒋介石』を書く。この中で日中戦争の運命を予言的に描いた。ヘディンは「日本が中国に対して名誉ある和平条件を与えさえすれば、極東において祝福される平和が訪れるはずである。」と結論し、「日本と中国という、二つの偉大で親切な国民を愛し、尊敬しているわれわれは、それを確信しているのだ。」とも言った。第四回探検中の貴重な資料は、日本軍を避けて次々と転送していくうちに行方不明にもなった。

『ヘディン交遊録』金子民雄（旧『ヘディン 旅と人』白水社）中公文庫

ヘディンと関係が深かった人で、中央アジアと特に係わりのあった人に限ることにして、17人を取り上げてヘディンの生涯をたどれるような本とした。ところが中央アジアとは関係のない、北極探検のノルデンショルド（スウェーデン人）は入っているが、光瑞はいない。

- ・日本人は、河口慧海（33ページ）と橋瑞超（16ページ）の二人である。
- ・旧版に入れられなかった「ロシア皇帝ニコライ二世」を新稿として加え、他にも次々と加筆したら今度は分量が多くなったので、「オスカー二世」「ナスール・エツ・ビン皇帝」「志賀重昂」「明治天皇」を除いた。日本人が前著には四人いたことになるが、前著でも光瑞はいない。「大谷光瑞」を新しく加えるつもりだったが、長すぎるため諦めた。光瑞を入れない理由として、単に長すぎるだけでは説得力がないように思う。
- ・ノルデンショルド スウェーデンの極地探検家。ベーリング海峡を抜けて日本に来た。息子がヘディンの友人。ヘディンを励ます。
- ・ヴァーンベリィ ヘディンの最初の本『ペルシャ・メソポタミア・コーカサス横断』1887の序文を書いた。
- ・リヒトホーフエン シルクロード（ザイデンシュトラーク）の名付け親。ドイツベルリン大の地質学者。プルジュワルスキーとロプ・ノールの位置で論争した。
- ・李鴻章（リーホンチャン）西太后の老練な政治家、1回しか会っていない。
- ・ニコライ二世 大津事件の人。ヘディンの探検を援助。何回も会っている。ロシア革命で殺された。第三次後の日本訪問の帰りも報告のため謁見。この間日露戦争がありロシアは負けたが、広大なロシアにとって、それは極東の小部分の負けに過ぎなかった。
- ・クロパトキン将軍 日露戦争将軍。ヘディンを援助しコサック兵を付ける。
- ・コズロフ ロシアの探検家、大プルジュワルスキーの弟子。
- ・カーゾン卿、・クロポトキン、・ヤングハズバンド、・スタイン、・河口慧海、・橋瑞超、・蒋介石
- ・黄文弼（オウブンピツ）中国の考古学者だが悪者。
- ・マルネル Heim フィンランド人だがロシアの軍人。
- ・ミレ・ブロマン ヘディンの一方的恋人？妹の友人、社交界の花形の時に失恋。他の人と結婚したが、早くに亡くなり、彼女の娘がヘディンの晩年の世話をし、臨終にも立ち会う。
- ・河口慧海 ヘディンは第三次探検の時、ブーマプトラ川（ヤルツァンポー）インダス・サトレジの各水源の源流について新発見と主張したが、既にそこは河口慧海によって歩かれていて、著書にも書いてあった。そこで慧海と手紙で交流した。だから、ヘディンは河口慧海を評価していた。初めの内こそ日本における河口の微妙な立場を知らず、講演のなかで師のチベット旅行記を称えた。この時日本の学会はどんな反応をしたのかは不明。ただ明らかに中傷とまではいかないにしても、あまり良い印象をヘディンには与えなかった。そして、日本における河口のかんばしくない噂—チベットに実際入っていない、「西藏旅行記」はいい加減なもの、を聞かされたらしい。これを裏づけるヘディン宛の光瑞の手紙も残っている。その理由は、ラサ入り二番目の成田安輝（外務省機密費を受けたので学会はこれを重視した）をかえって評価し、”頑なで宥和性のない河口の書いたものなど日本では誰も信じる者はいません。

- ・慧海のヘディン宛手紙—「(ラサにいる時、ヘディンがチベット北方国境にいたことをよく耳にした) 日本においてご親切にもわが国人に私のことについてお話しくさいましたことを、心よりお礼申し上げます。私は共同の調査地域をもつ仲間同士とし、尊敬の気持ちを持ってあなたを見ております」(光瑞の手紙は、ヘディンとはあくまでも対等か友人としてふるまっている)
- ・チベットに潜入する段階で、慧海に何か問い合わせた可能性は大きいと金子は見る。同時にこの頃光瑞に北京政府に護照発給を促すよう依頼してもいた。
- ・慧海の手紙は、きわめて丁重で筆跡も大変すばらしい。光瑞の手紙はそれに比べれば達意で、その代わり書きとぼしたり、意味の取りにくい…。肉質の手紙と言うのは、決して活字になった文章からでは分からない、その人の内面と性格をよく映しているように思えると金子も河口を評価する。
- ・このようにヘディンは、はじめは慧海を評価していた、後年極めて冷静に評価している。—「河口のほんもまたきわめてロマンチックであり、たとえ彼が西側の探検家たちを嫌っているとしても、われわれは彼とラマの国を旅していくその孤独なあり方が好きにならずにいられないのである」(「南チベット」第二巻 1917)

(第三次の成果を持ってインドに戻り、「ミントー卿やダンロップ・スミス大佐に礼を述べ、インド総司令官キッチン—元帥のすすめもあって、故国スウェーデンには帰らず、日本の招聘に応じて来日したのだった」と金子は書く。《大谷光瑞との約束を果たすべく》とでも入れればいいのに、なぜか光瑞の招聘とは明言しない) →しかし来日してみると日本での河口の評価は低いもので悪口も聞いた。その後西本願寺との間で「**玉手箱事件**」が起きる。(1917年、河口がダライラマよりもらった経典が、実は光瑞宛のものだと青木文教が主張して論争になった事件。ただ1902年光瑞と河口は、河口の第一回3年間のラサ潜入後の12月、インドのブッダガヤで会っている。) →そこでヘディンは大谷に世話になったし河口に敵対しているしなので、光瑞との交際を避けた。同時に光瑞は法主を退任、アジア主義に走ると疎遠になった。(23・29年の来日でも会わなかった。)

光瑞とヘディン、二人がチベットにこだわったのは何故か？

光瑞—仏典

ヘディン—地図の空白、未知の探検

だから、光瑞は慧海を嫌い、ヘディンは評価する

さて、ヘディンは日中戦争の時、日本は中国に勝てないだろうと予言した。中国の広大さ、西域の広がり、自然の厳しさを知っていたヘディンは、中国の沿岸部しか知らない日本人は勝ち目はないと思ったからだ。

- ・ヘディンはスケッチが巧みで、写真撮影が自由でない時代、これは探検家としての一つの力であった。
- ・**橋瑞超** 楼蘭発掘調査、位置の電文の紹介。瑞超が亡くなる前、金子は直接聞いていて、1982年「ヘディン 人と旅」(白水社)で発表している。
スタインと会って、ミーランのフレスコ画のありかを聞いた。それを探し出して無理に剥ぎ取ろうとしたが失敗して粉々に砕いてしまった。

参 考 書 籍

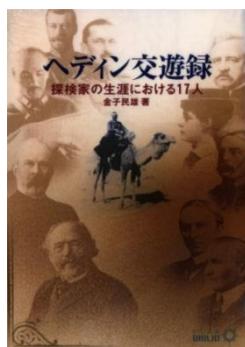
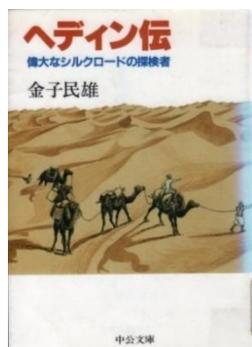
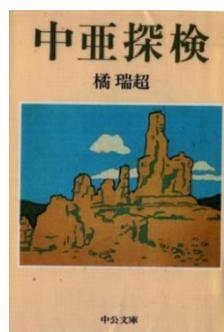
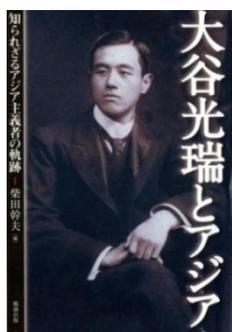
★大谷光瑞関係（前回の読書会の参考図書以外）

1. 『大谷光瑞とアジア—知らされるアジア主義者の軌跡』柴田幹夫編 勉誠出版 2010.8.10
2. 『二楽荘史談』和田秀寿編著 国書刊行会 2011.11.7

★橘瑞超の本 『中亜探検』橘瑞超 中公文庫

★ヘディン関係

1. 『探検家としてのわが生涯』山口四郎訳 白水社
2. 『ヘディン伝—偉大なシルクロードの探検者』金子民雄 中公文庫
3. 『ヘディン交遊録—探検家の生涯における17人』金子民雄 中公文庫（旧『ヘディン 旅と人』白水社）
4. 『秘められたベルリン使節—ヘディンのナチ・ドイツ日記』金子民雄 中公文庫



★ヘディン翻訳著作（高本）

- ①『独逸従軍記』（宮家寿男訳 1915 大倉書店）、②『北極と赤道』（守田有秋訳 1926 平凡社）、③『馬仲英の逃亡』（小野忍訳 1938 改造社）④『中央亜細亜探検記』（岩村忍訳 1939 富山房）、⑤『赤色ルート踏破記』（高山洋吉訳 1939 育成社）、⑥『ゴビの謎』（福迫勇雄訳 1940 生活社）、⑦『独逸への回想』（道本清一郎訳 1941 青年書房）、⑧『リヒトホーフエン伝』（高山洋吉訳 1941 慶應書房）、⑨『ゴビ砂漠横断記』（限田久尾訳 1942 鎌倉書房）、⑩『探検家としての余の生涯』（小野六郎訳 1942 橘書店）、⑪『西藏征旅記』（吉田一次訳 1942 教育図書出版）、⑫『熱河』（黒川武敏訳 1943 地平社）、⑬『彷徨える湖』（岩村忍・矢崎秀夫訳筑摩書房 1943）、⑭『禁断秘密の国』（田中隆泰訳 1943 青葉書房）、⑮『絹の道』（橋田憲輝訳 1944 高山書院）、⑯『ヘディン中央アジア探検紀行全集』1-11（横川文雄他訳 1964～5 白水社）、⑰『ヘディン探検紀行全集』1-9（金森誠也他訳 1978～9 白水社）、⑱『チベット遠征』（金子民雄 1992 中公文庫）、⑲『探検家としての我が生涯』（山口四郎訳 1997 白水社）、⑳『スウェン・ヘディン探検記』1-9（横川文雄他訳 1988～9 白水社）